

二年ぶりの訪韓

神戸電鉄敷設工事で犠牲となつた朝鮮人労働者の遺族を訪ねる韓国への旅

卷之三

去る五月一七日、二年ぶりに韓国を訪れた。神戸電鉄敷設工事の過程で犠牲となつた朝鮮人犠牲者の遺族に会うためである。

「昨年の七月に結成された『神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者を調査し追悼する会』(代表・落合重信)はその調査活動を続けてきたが、当時の新聞記事から、五件の事故で合計一三名の労働者が犠牲となつたことを確認した。いずれも朝鮮人である。事故の日付および犠牲者の氏名は、左頁の表のとおりであるが、ひとつ三名の犠牲者のうち▲印の八名については鶴越の火葬場で、台帳より火葬されたことを確認することができた。また表にある本籍は新聞記事に書かれていたものであるが、その本籍地の面事務所に問い合わせたところ、●印の三名の人については遺族を確認することができた。(⑨金鳳斗さんと⑩金東圭さんは親子で犠牲となつた。)

一九三六年一月二十五日の藍那トンネルの事故で亡くなられた。藍那駅より五〇〇mほど西にあるトンネル(地図の5)である。

に、今年の四月初めに手紙を書いた。直接訪韓してお話を伺いたいこと、八月の追悼式に来日していただきたいことなどを書き、事故の様子を伝える当時の新聞記事も同封した。しばらくして、おふたりから返事をいただいた。黄善済さんは、「恥かしいことに私は祖父の死亡原因を知らずに過ごしてきました。最大限の助力をおいたします」（黄善済）、「思いがけない消息で我々はとても驚きましたが、大変うれしい知らせでした。お会いできる日を折りり数えてお待ちしています」（金漢圭）という内容だった。「追悼する会」事務局で相談をし、事務局長の私が代表して訪韓することになったのである。

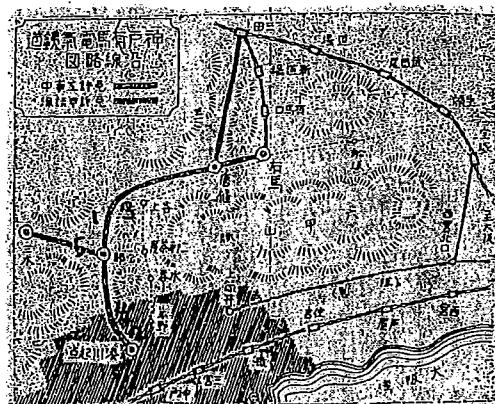
でつながつている全長六六・四キロドルの鉄道である。一九二五年三月に設立された神戸電鉄の前身の神戸有馬電気鉄道は、まず六甲山北側にある有馬温泉と神戸の市街地を結ぶための敷設工事に着手した。その工事のうち、特に湊川一鉛蘭台間が山間をぬう難工事で、七名の犠牲者が出ていている。

また、一九三六年一一月には三木電気鉄道㈱が設立され、翌三七年にかけて鈴蘭台一広野ゴルフ場間の敷設工事が行なわれ、その過程で六年一一月二五日に金鳳斗さんら六名が死亡する藍那トンネルの事故が起こつたのである。工事を請け負ったのは日本工業合資会社で、同社は小林長兵衛が一九一四年に設立した会社

の夜間作業中、落盤事故で亡くなられた。東山は、地図の湊川駅のすぐ北にある。私が小学校四年まで暮らした所から二〇分くらいのところまで、小学校の校区外であつたが何度も行つたことがあるところだ。金鳳斗さんと金東圭さんは

神戸電鉄敷設工事と朝鮮人

神戸電鉄㈱は、戦後の一九四七年に、神戸有馬電気鉄道㈱と三木電気鉄道㈱が合併してできた会社である。現在では、神戸市内の新開地駅から北東に三田まで、北西に三木を経て粟生ま



1～5は死亡事故発生現場  
「神戸新聞」1927年7月13日

1994・5・29

神戸電鉄敷設工事で犠牲となつた朝鮮人たち（13名+α）  
(神戸新聞と朝日新聞より作成)

## 【死者名簿】

1. 1927年8月1日 2名 山田町下谷上 竹藪切取り工事中に土砂崩壊  
 ①韓 啓文 42歳  
 ②趙 凤珠 30歳

2. 1928年1月15日 2名 神戸市東山町4丁目東山トンネル東入口で夜間作業中  
 ▲③金 相燮 26歳 慶尚北道榮川郡上里面古墳羽  
 ●▲④黃範寿 31歳 慶尚南道蔚山郡農所面

3. 1928年5月7日 2名 山田村原野の字奥谷 石が墜落 下敷  
 ⑤朴 鍾述 27歳  
 ⑥金 永得 26歳

4. 1928年10月23日 1名 烏原貯水池の奥 トロッコ同士の衝突  
 ▲⑦姜 太龍 26歳

5. 1936年11月25日 6名 山田村藍那トンネル東入口 土砂崩壊  
 ▲⑧朴 南模 32歳 慶尚北道高靈郡雲水面黒樹里  
 ●▲⑨金 凤斗 47歳 慶尚南道固城郡下二面月興里 父  
 ●▲⑩金 桂 25歳 同上 子  
 ▲⑪李 命福 24歳 慶尚北道盈德郡南亭面鳳田洞  
 ▲⑫姜 学守 35歳  
 ▲⑬陳 南述 30歳  
 ※注 ▲印はひよどり越斎場の台帳で確認、●印は本籍地で確認

當をしたりもしていた。小林長兵衛は、神戸有馬鉄道㈱の株のうち個人株主としては最高の五千株(5%)を保有し、息子の小林秀雄も二千株(2%)を保有した。一九三〇年から就任しており、小林長兵衛は一九四一年七月より第七代の社長に就任している(四三)

## 【重傷者名簿】

1. 1928年10月23日 4名重傷 烏原水源地の奥 県立病院に収容治療  
 ①許 石道 21歳  
 ②田 慶泰 29歳  
 ③?  
 ④?

2. 1929年1月10日 1名重傷 下谷上 神有電鉄軌道内で作業中  
 ①? (32歳 中村次郎)

3. 1936年11月25日 5名重傷 山田村藍那 林田区の兵庫病院に収容治療  
 ①朴 潤垣 (36歳 木村文吉)  
 ②田 潤 (23歳 安田文吉)  
 ③変 實燐 (23歳 太田一郎)  
 ④趙 敬乞 (27歳 田中次郎)  
 ⑤金 敬炳 (28歳 上村某)

年四月死亡により辞任)。そしてまた息子の小林秀雄は、戦後の一九四六年四月より第九代の社長に就任している(六〇年五月まで)。「追悼する会」との交渉において神戸電鉄㈱は、「当時の事故は下請け会社がしたことで当社とは関係がない」という態度をとっているが、このよ

うな小林一族と神戸電鉄との関係を考えれば、「下請けが…」という態度は、あまりにもひどいと言わざるをえない。

敷設工事の過程では、①一九二七年七月、②同年九月、③同年一〇月、④一九二八年四～五月の四次にわたって労働争議が起つていて、それは「賃金支払い」等を求めるもので、労働条件が劣悪であつたことが察せられる。

## 固城郡に金漢圭さんを訪ねて

遺族の黄善濟さんは蔚山市、金漢圭さんは固城郡におられる。いずれも慶尚南道である。釜山への飛行機の手配をしてから、韓国の大學生から電話をし、訪問予定の日を知らせた。

五月一七日の夕方、釜山に到着すると、むくげの会とは長い付き合いである釜山外国语大学の林オングュさんと釜山滞在中の出水さんが出迎えてくれた。本当にありがたいことに林さんが固城まで自家用車で同行してくれるのである。空港から固城の金漢圭さん宅に電話を入れると、夕食も用意しているので食事をせずにすぐ来るようになつたことだ。固城郡はとても広いが、目的地の下二面はその西の端にある。三千浦のすぐ東である。車は金海空港から馬山、晋州を通つて三千浦に向う。三千浦は海岸沿いにあり、夕焼けがとてもきれいだった。空港から二時間ほどかかつて下二面につくと、金漢圭さんが道まで出迎えに来て下さり、昨年九月に借金をし建てる替えたという家に案内してくれた。家の隣には農耕用の牛のいる納屋があつた。家金漢圭さんは一九三六年の藍那トンネル事故

のとき九歳で、亡くなられた父の金鳳斗さんは、当時四七歳、兄の金東圭さんは二四歳だった。金漢圭さんの家で私たちを待つていて下さったのは、金さん、<sup>金</sup>さんの奥様の李今年さん、近所にいた親戚の趙輝旭さん（妹が金漢圭さんの兄と結婚、事故当時一歳で葬式のことを覚えている）、それに事故当時二歳であった姉の金順牙さんの四名である。金順牙さんは戸籍では生存も確認できなくて、お会いできるとは考えていなかつた方である。

そこで伺つたお話を次のようなことだ。

日本には、金鳳斗さんとその兄、それに息子の金東圭さんが、事故の五年ほど前に行つた。金鳳斗さんは、渡日後奥さんが亡くなれたりして何回か朝鮮に帰つてこられており、その後再婚もされている。当時朝鮮で貧しい暮らしをしていて働くために渡日したという。金東圭さんは、日本に勉強するために行つたが、朝鮮には一度もどらずに事故で父と一緒に死んだ。

二人とも村で評判のいいほど頭がよく、村の人たちは、もつたないことをしたと言つていた。遺骨は、後妻の崔始女さんが（）日本に引き取りに行き、二〇日後ぐらい後に持ち帰つたといふ。当時貧しかつたが質素な葬式をし、山に二人の墓を作つた。金鳳斗さんの墓は今でも近くの山にあるが、そこはもともと金鳳斗さんが父のために購入していた百坪ほどの土地である。

金東圭さんの墓はすぐその下のところに作つたが、そこは人の土地で、数年前に地主が墓を壊して烟にしてしまつた。金順牙さんは、墓が急な坂の上にあり、また、行くと悲しくなるので

この二〇年間行つていない。事故があつたのは、旧暦の一〇月一二日で、今でもその日に祭祀をしているという。

事故のあつたとき九歳の金漢圭さんは、同時に父と兄を失い、後妻の崔始女さんはその後実家にもどり、姉の金順牙さんもその後結婚して、金漢圭さんはひとりで大変苦労をしたという。金漢圭さんの兄<sup>リ</sup>金龍圭さんも日本に行つたまま行方不明で、今も龍圭さんのお奥さんはひとりで暮らしているという。

夜は、三千浦の旅館に泊るつもりだつたが、どうしても泊つていけというので、その日は三人とも金漢圭さんの家に泊めていたことにした。

翌一八日には、朝からお墓参りをした。お墓は家から二、三キロの、村を見渡すことのできる山の中腹にある。墓標のない土まんじゅうの墓の前で朝鮮式のお参りをし、私も日本から持つてきたお酒をささげた。金漢圭さんと奥さんは、日本から五八年ぶりに日本人が訪ねてきたことを報告した。すぐ下にあつたという金東圭さんのお墓のあつたという所まで行つてみたが、そこはもう畠になつてしまつていて。

金鳳斗さんの奥さんが一〇年ほど前に亡くなられたということで、金漢圭さんはもう一〇日前に来てくれていたらという思いも語られていて、残念ながらお会いできないとのことだつたが、一方で、もう一〇年遅かつたらこのようない出会いをすることができなかつたかもしれないと話合つた。

蔚山、そしてまた釜山へ

一九日は、蔚山に黄範寿さんの遺族を訪ねる日である。朝、ホテルに金大植さんと日本に留学していた金河元さんが迎えに来てくれた。蔚山までは車で一時間ほどの距離だ。蔚山のホテルでは、黄範寿さんの息子の奥様<sup>リ</sup>尹福祚さんが待つていて下さつた。手紙や電話のやり取りをした黄善洛さんは仕事でソウルに出かけていて、残念ながらお会いできないとのことだつたが、一方で、もう一〇年遅かつたらこのようない出会いをすることができなかつたかもしけれられた。尹福祚さんも、今回の訪問を大変喜ん

この二〇年間行つていない。事故があつたのは、旧暦の一〇月一二日で、今でもその日に祭祀をしているという。

事故のあつたとき九歳の金漢圭さんは、同時に父と兄を失い、後妻の崔始女さんはその後実家にもどり、姉の金順牙さんもその後結婚して、金漢圭さんはひとりで大変苦労をしたという。金漢圭さんの兄<sup>リ</sup>金龍圭さんも日本に行つたまま行方不明で、今も龍圭さんのお奥さんはひとりで暮らしているという。

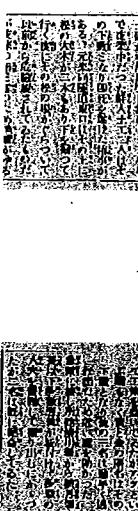
夜は、三千浦の旅館に泊るつもりだつたが、どうしても泊つていけというので、その日は三人とも金漢圭さんの家に泊めていたことにした。

翌一八日には、朝からお墓参りをした。お墓は家から二、三キロの、村を見渡すことのできる山の中腹にある。墓標のない土まんじゅうの墓の前で朝鮮式のお参りをし、私も日本から持つてきたお酒をささげた。金漢圭さんと奥さんは、日本から五八年ぶりに日本人が訪ねてきたことを報告した。すぐ下にあつたという金東圭さんのお墓のあつたという所まで行つてみたが、そこはもう畠になつてしまつていて。

金鳳斗さんの奥さんが一〇年ほど前に亡くなられたということで、金漢圭さんはもう一〇日前に来てくれていたらという思いも語られていて、残念ながらお会いできないとのことだつたが、一方で、もう一〇年遅かつたらこのようない出会いをすることができなかつたかもしけれられた。尹福祚さんも、今回の訪問を大変喜ん

神有電車の隧道崩壊  
鮮人十一名惨死す

神戸東山町四丁目の隧道



事故を伝える「神戸新聞」  
(1928年1月16日)

1994・5・29

でください、事故のことなどは伝え聞いただけのことだが、いろいろ話して下さった。そして、事故当時、生まれて八ヵ月だった娘の黄戊順さんが釜山に健在で、是非会うようとのお話を伺つてから、また釜山に引き返し、夕方に今度は黄戊順さんとホテルで待ち合わせた。黄さんは娘さんと一緒にホテルに来て下さった。黄さん福祚さんと黄戊順さんからお話を伺つてから、また釜山に引き返し、夕方に今度は黄戊順さんとホテルで待ち合わせた。黄さんは娘さんと一緒にホテルに来て下さった。

尹福祚さんと黄戊順さんからお話を伺つてから、また釜山に引き返し、夕方に今度は黄戊順さんと一緒にホテルに来て下さった。黄さんは娘さんと一緒にホテルに来て下さった。

黄範寿さんが亡くなられたのは、陰曆の一二月二二日で、亡くなる前の晩秋に日本にいき、その冬に亡くなつた。神戸の炭鉱で、落盤事故のため亡くなつたと聞いていたが、今回、それ

## 事務道隧道那藍電木三

### 無残十一名か埋没

### 大音響で岩石崩壊 嘆き六名は即死

事故を伝える「神戸又新日報」(1936年11月26日)

が、電車のトンネル事故であつたことがわかつた。骨壺と銅錢ひとにぎりが小包で、死亡後、三ヵ月くらいして届いた。黄範寿の奥さん(蒋容順さん)は、死亡後に大変な苦労をしたが、黄戊順さんを小学校まで出させてくれたという。黄範寿さんが亡くなられた東山トンネルでの事故は、一九二八年のことだから実に六八年前の話である。黄さんの遺族は、まさに思いもかけない「関係者」の出現を、心から喜んで下さつた。

### 旅の収穫・旅の反省

その夜は、金大植さんのお宅に泊めていただけ、翌二〇日には空港に行く前に釜山大学の教師で以前この通信で紹介した『鴨緑江の冬』の訳者でもある青柳純一さんとその学生たちと話をした後、あわただしく神戸に戻ってきた。今回の訪問では、予想していなかつた方にお会いすることができた。固城の金順牙さんと釜山の黄戊順さんである。その意味でも訪韓の目的は充分に達せられたと思う。

それにしても聞き取り調査の中で慶尚道方言は、自分でも情けなくなるくらい理解できなかつた。金漢圭さんの息子さんや黄善済さんは、私とそれほど年も変わらず電話で話しても、私の朝鮮語でも問題はなかつたが、上の世代の言葉は本当にむつかしかつた。取材旅行のシャーナリストとしては失格だつたようだ。

いま「追悼する会」が進めている神戸電鉄敷設工事の朝鮮人犠牲者の調査活動は、一九二〇年代、三〇年代のことであり、調査は困難な面

も多いが、いくつかの幸運に恵まれていると思う。朝鮮戦争のために植民地時代の戸籍が焼失している場合も多いと聞いているが、今回の遺族が固城郡、蔚山郡と朝鮮半島の南東部にあつたので当時の戸籍がそのまま残つていたのかかもしれない。また、今回の訪韓では「追悼する会」事務局では私だけが時間を都合して行けることになつたが、古くからの友人のいる釜山が調査のベースであつたことも幸いなことであつた。

また、韓国の遺族に朝鮮語の手紙を書くとき、また、録音してきたテープを聞いてもらたりするのに私の後輩に当る神戸大学農学部の留学生鄭燦圭さんにも大変お世話になつた。今回の旅は、持つべきものは友達だ、と、改めて感じさせてくれた旅でもあつた。

「追悼する会」では、神戸電鉄が八月に大池の興隆寺で開く法要に朝鮮人犠牲者の遺族を招くよう必要としている。しかしそれが実現しなくとも、会として遺族を招待し独自の追悼式を開く予定である。会ではみなさんのご支援をお願いするとともに、神戸電鉄敷設工事の朝鮮人犠牲者に関する情報を寄せて下さることを期待している。

(ひだ ゆういち)

※ 神戸電鉄と朝鮮人の問題について、次の文献を参照して

①若生みすず「神有電鉄工事の朝鮮人土工議論について」(『在日朝鮮人史研究』13号、一九八四年四月所収)

②神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者を調査し追悼する会編『神戸電鉄敷設工事と朝鮮人労働者』(資料集)(一九九三年七月)

③金海海「神戸電鉄をつくった同胞たち」(兵庫朝鮮関係研究会編『在日朝鮮人90年の軌跡』統一兵庫と朝鮮人)一九九三年二月)